

Discussion Paper Series

RIEB

Kobe University

DP2024-J08

環境意識と投資・消費行動
— ゆうちょ財団「第6回 暮らしと生活設
計に関する調査」に基づく分析 —

家森 信善
上山 仁恵

2024 年 10 月 21 日



神戸大学 経済経営研究所

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 2-1

環境意識と投資・消費行動[#]

— ゆうちょ財団「第 6 回 暮らしと生活設計に関する調査」に基づく分析 —

神戸大学経済経営研究所 家森信善

名古屋学院大学経済学部 上山仁恵

<要旨>

各種の調査によると、ESG や SDGs の認知度は年々上昇し、環境に配慮した消費行動を取る人は増加している。しかし、金融面に焦点を当てると、個人の行動にそうした環境配慮型の投資行動が十分に見られないことが指摘されてきた。そこで、本論文は、ゆうちょ財団が実施した「第 6 回 暮らしと生活設計に関する調査」を基に、環境意識と金融行動の関係を分析した。その結果、環境意識が高い個人は、必ずしも金融リテラシーが高くないことが示された。そして、環境リテラシーが高くても、金融リテラシーが低い人の場合、社会的に貢献度の高い企業への投資に積極的ではない傾向が見られた。この結果は、スウェーデンの家計を分析した先行研究と一致しており、環境意識が高い個人はしばしば金融知識に乏しく、金融行動を通じて環境に貢献できることを知らないことが一因であると考えられる。

1. はじめに

生活者の間で ESG や SDGs の認知が高まってきた。たとえば、朝日新聞社の「第 10 回 SDGs 認知度調査」(2024 年 1 月実施)によれば、「SDGs という言葉を聞いたことがある」人の比率は 88.7%であった¹。第 1 回(2017 年 1 月)の調査での同比率は 12.2%であったことから、SDGs の認知は急速に高まってきていることがわかる。また、SDGs に対する関心を尋ねた質問に対して、「非常に関心がある」または「少しは関心がある」と答えた人は 52.8%と過半数であった。

そして、商品購入やサービス利用の際に SDGs に沿ったものであるかどうかをどの程度考慮するか

[#] 本稿は、ゆうちょ財団の「2024 年度 研究助成」を受けた共同研究の成果である。

¹ <https://www.asahi.com/sdgs/article/15212866>

という質問に対して、「考慮したい」「やや考慮したい」の合計は全体で 35.4%であった。また、SDGs に沿った商品、SDGs の活動に熱心な企業のサービスは、他に比べて価格がどうなら購入／利用したいと思うかという質問に対して、価格が高くて（「やや高い程度」を含む）購入／利用したいという人が 24.4%であり、同程度なら購入／利用したいという人を含めると 67.5%であった。

一般の消費活動と同様に、SDGs 意識が高まれば、生活者は SDGs を考慮した金融行動をとるようになると思うのが自然である。この点で、Anderson and Robinson (2022)は、スウェーデンの家計に対してアンケート調査を行って、サステナブルの意識の高い家計がグリーン投資に積極的かどうかを分析した。そして、環境意識の高い個人は実際にはグリーン投資を行っていないという意外な結果を得たのである。彼らは種々の分析を重ねて、この結果は、環境意識の高い個人は金融知識に乏しく、そもそも金融投資を積極的に行わない傾向があるためだとしている。

残念ながら、日本ではスウェーデンのような個人投資家の詳細な投資行動が公的当局から提供される仕組みはなく、別の検証方法をとらねばならない。そこで、本研究では、ゆうちょ財団が実施した「第 6 回 くらしと生活設計に関する調査」（2023 年 11 月～12 月 回答者 1938 人）の個票データを利用して、生活者の環境意識の強さと金融行動の関係を調査することにした。

2. 性別・年代別の環境意識（環境リテラシー）の比較

「第 6 回 くらしと生活設計に関する調査」で、環境意識に関わる質問は、「環境にやさしい商品を選ぶ」という文に対してどの程度当てはまるかを聞いた質問である。全体の回答状況（表 1）を見ると、「当てはまる」が 11.7%、「やや当てはまる」が 44.4%、「あまりあてはまらない」が 34.0%、「あてはまらない」が 9.9%であった。「当てはまる」と「やや当てはまる」の合計が半数を超えており、環境に配慮した商品選びをする人の方が多い。ただし、逆に言えば、4 割の人は環境に対する意識が弱いとも言える。本稿では、この回答を環境リテラシーと捉えることにする。

男女別で比較すると（表 1）、分布・平均値ともに 1%水準の有意差があり、女性の方が環境にやさしい商品を選ぶ人が有意に多い（平均値は、「当てはまる」を 4 点から、「あてはまらない」を 1 点に点数化したもの）。

年代別で比較すると（表 2）、老年層ほど環境を意識した商品選びをする人が有意に多く、50 歳代以下では有意に少ない。男女別で比較しても同じ傾向が見られるが、男性は 30 歳代以下と 70 歳以上で意識の違いが見られるのに対し、女性は 50 歳代以下と 60 歳代以上で意識が分かれる傾向が見られる。

表 1 「環境にやさしい商品を選ぶ」男女比較

	男性	女性	全体
合計	932 (100%)	983 (100%)	1915 (100%)
当てはまる	84*** (9.0%)	140*** (14.2%)	224 (11.7%)
やや当てはまる	397 (42.6%)	453 (46.1%)	850 (44.4%)
あまりあてはまらない	336* (36.1%)	316* (32.1%)	652 (34.0%)
あてはまらない	115*** (12.3%)	74*** (7.5%)	189 (9.9%)
カイ 2 乗統計量	25.9***		
平均値	2.48	2.67	2.58
標準偏差	0.82	0.81	0.82
Mann-Whitney U 統計量	4.82***		

(注) ***は 1%水準、**は 5%水準、*は 10%水準で有意であることを表す。

■は調整済み残差より有意に多い、■は有意に少ないことを意味する。

Mann-Whitney U 統計量は平均値の差の検定統計量（平均値を出すデータの正規性を仮定しないノンパラメトリック検定）。2 変数の平均値の差は Mann-Whitney U 統計量、2 変数以上の場合は Kruskal-Wallis 統計量となる。
(以下、同様)

表 2 「環境にやさしい商品を選ぶ」年代比較

全体						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	177 (100%)	226 (100%)	310 (100%)	348 (100%)	330 (100%)	524 (100%)
当てはまる	14 (7.9%)	11*** (4.9%)	23*** (7.4%)	26*** (7.5%)	34 (10.3%)	116*** (22.1%)
やや当てはまる	51*** (28.8%)	67*** (29.6%)	139 (44.8%)	157 (45.1%)	168*** (50.9%)	268*** (51.1%)
あまりあてはまらない	86*** (48.6%)	106*** (46.9%)	122** (39.4%)	130 (37.4%)	104 (31.5%)	104*** (19.8%)
あてはまらない	26** (14.7%)	42*** (18.6%)	26 (8.4%)	35 (10.1%)	24* (7.3%)	36*** (6.9%)
カイ 2 乗統計量	186.7***					
平均値	2.30	2.21	2.51	2.50	2.64	2.89
標準偏差	0.82	0.80	0.75	0.78	0.76	0.83
Kruskal-Wallis 統計量	154.9***					

男性						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	85 (100%)	108 (100%)	143 (100%)	193 (100%)	154 (100%)	249 (100%)
当てはまる	4 (4.7%)	4** (3.7%)	11 (7.7%)	12 (6.2%)	13 (8.4%)	40*** (16.1%)
やや当てはまる	27** (31.8%)	30*** (27.8%)	61 (42.7%)	81 (42.0%)	65 (42.2%)	133*** (53.4%)
あまりあてはまらない	39** (45.9%)	52*** (48.1%)	55 (38.5%)	76 (39.4%)	56 (36.4%)	58*** (23.3%)
あてはまらない	15 (17.6%)	22*** (20.4%)	16 (11.2%)	24 (12.4%)	20 (13.0%)	18*** (7.2%)
カイ 2 乗統計量	67.4***					
平均値	2.24	2.15	2.47	2.42	2.46	2.78
標準偏差	0.80	0.78	0.79	0.79	0.83	0.80
Kruskal-Wallis 統計量	62.9***					

女性						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	92 (100%)	118 (100%)	167 (100%)	155 (100%)	176 (100%)	275 (100%)
当てはまる	10 (10.9%)	7*** (5.9%)	12*** (7.2%)	14** (9.0%)	21 (11.9%)	76*** (27.6%)
やや当てはまる	24*** (26.1%)	37*** (31.4%)	78 (46.7%)	76 (49.0%)	103*** (58.5%)	135 (49.1%)
あまりあてはまらない	47*** (51.1%)	54*** (45.8%)	67** (40.1%)	54 (34.8%)	48 (27.3%)	46*** (16.7%)
あてはまらない	11* (12.0%)	20*** (16.9%)	10 (6.0%)	11 (7.1%)	4*** (2.3%)	18 (6.5%)
カイ 2 乗統計量	136.9***					
平均値	2.36	2.26	2.55	2.60	2.80	2.98
標準偏差	0.83	0.81	0.72	0.75	0.67	0.84
Kruskal-Wallis 統計量	98.1***					

3. 性別・年代別の金融リテラシーの比較

本調査では、金融リテラシーの尺度として使える質問は、預金保険(問 13)²、複利計算(問 14)³、分散投資(問 15)⁴に関する 3 つである。回答者全体の結果を見ると (表 3)、預金保険の保護対象になっ

² 問 1 3 は、「預金保険の保護の対象だと思う金融商品」として、下記の中から正しいものを選択する質問である。

- 1 外貨預金
- 2 株式投資信託
- 3 公社債投資信託
- 4 国債
- 5 住宅火災保険
- 6 定期預金
- 7 どれも保護されない

³ 問 1 4 は、「金利 2 % の 1 0 0 万円の預金の 1 0 年後の額」として、下記の中から正しいものを選択する質問である。

- 1 120 万円超
- 2 120 万円ちょうど
- 3 120 万円未満

⁴ 問 1 5 は、「一社の株式購入と投資信託では、一社の株式購入の方が損益の揺れ幅が小さくなる」の正誤を尋ねた質問である。

- 1 正しい
- 2 間違っている
- 3 分からない

ている金融商品の正答率は約 6 割 (59.7%)、複利計算の正答率は 37.4%、分散投資の正答率は 41.6% である。性別で金融リテラシーを比較すると、預金保険の正答率に有意な男女差は見られないが、複利計算や分散投資の正答率は男性の方が 1% 水準で有意に高い。

3 問の正答数について見ると、分布・平均値ともに男性の方が有意に高く、男性は 2 問以上正答者が有意に多く、女性は 1 問以下が有意に多くなっている。

年代別で比較すると (表 4)、男性は 60 歳以上から平均正答数が減る傾向が見られ、女性は 50 歳以上から減る傾向が見られる。

表 3 金融リテラシーの男女比較

	男性	女性	全体
合計	870 (100%)	895 (100%)	1765 (100%)
問 13 預金保険の正答率	511 (58.7%)	542 (60.6%)	1053 (59.7%)
カイ 2 乗統計量	0.61		

	男性	女性	全体
合計	903 (100%)	951 (100%)	1854 (100%)
問 14 複利計算の正答率	424*** (47.0%)	270*** (28.4%)	694 (37.4%)
カイ 2 乗統計量	68.2***		

	男性	女性	全体
合計	925 (100%)	956 (100%)	1881 (100%)
問 15 分散投資の正答率	453*** (49.0%)	330*** (34.5%)	783 (41.6%)
カイ 2 乗統計量	40.4***		

	男性	女性	全体
合計	857 (100%)	874 (100%)	1731 (100%)
(総合) 3 問正答者	207*** (24.2%)	117*** (13.4%)	324 (18.7%)
(総合) 2 問正答者	246*** (28.7%)	200*** (22.9%)	446 (25.8%)
(総合) 1 問正答者	239*** (27.9%)	343*** (39.2%)	582 (33.6%)
(総合) 0 問正答者	165*** (19.3%)	214*** (24.5%)	379 (21.9%)
カイ 2 乗統計量	54.5***		
平均値	1.58	1.25	1.41
標準偏差	1.06	0.97	1.03
Mann-Whitney U 統計量	-6.56***		

表 4 金融リテラシーの年代比較

全体						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	166 (100%)	220 (100%)	291 (100%)	324 (100%)	296 (100%)	434 (100%)
(総合) 3 問正答者	31 (18.7%)	53** (24.1%)	74*** (25.4%)	70 (21.6%)	55 (18.6%)	41*** (9.4%)
(総合) 2 問正答者	43 (25.9%)	55 (25.0%)	74 (25.4%)	94 (29.0%)	88* (29.7%)	92** (21.2%)
(総合) 1 問正答者	55 (33.1%)	65 (29.5%)	93 (32.0%)	95* (29.3%)	96 (32.4%)	178*** (41.0%)
(総合) 0 問正答者	37 (22.3%)	47 (21.4%)	50** (17.2%)	65 (20.1%)	57 (19.3%)	123*** (28.3%)
カイ 2 乗統計量	61.4***					
平均値	1.41	1.52	1.59	1.52	1.48	1.12
標準偏差	1.03	1.08	1.05	1.04	1.01	0.93
Kruskal-Wallis 統計量	50.9***					

男性						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	79 (100%)	107 (100%)	135 (100%)	181 (100%)	143 (100%)	212 (100%)
(総合) 3 問正答者	21 (26.6%)	33* (30.8%)	44** (32.6%)	53* (29.3%)	33 (23.1%)	23*** (10.8%)
(総合) 2 問正答者	27 (34.2%)	32 (29.9%)	31 (23.0%)	53 (29.3%)	50* (35.0%)	53 (25.0%)
(総合) 1 問正答者	18 (22.8%)	20** (18.7%)	35 (25.9%)	46 (25.4%)	38 (26.6%)	82*** (38.7%)
(総合) 0 問正答者	13 (16.5%)	22 (20.6%)	25 (18.5%)	29 (16.0%)	22 (15.4%)	54*** (25.5%)
カイ 2 乗統計量	49.5***					
平均値	1.71	1.71	1.70	1.72	1.66	1.21
標準偏差	1.04	1.12	1.12	1.06	1.00	0.95
Kruskal-Wallis 統計量	35.0***					

女性						
	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
合計	87 (100%)	113 (100%)	156 (100%)	143 (100%)	153 (100%)	222 (100%)
(総合) 3 問正答者	10 (11.5%)	20 (17.7%)	30** (19.2%)	17 (11.9%)	22 (14.4%)	18*** (8.1%)
(総合) 2 問正答者	16 (18.4%)	23 (20.4%)	43 (27.6%)	41* (28.7%)	38 (24.8%)	39** (17.6%)
(総合) 1 問正答者	37 (42.5%)	45 (39.8%)	58 (37.2%)	49 (34.3%)	58 (37.9%)	96 (43.2%)
(総合) 0 問正答者	24 (27.6%)	25 (22.1%)	25*** (16.0%)	36 (25.2%)	35 (22.9%)	69*** (31.1%)
カイ 2 乗統計量	30.0**					
平均値	1.14	1.34	1.50	1.27	1.31	1.03
標準偏差	0.95	1.01	0.98	0.97	0.98	0.90
Kruskal-Wallis 統計量	24.5***					

4. 環境リテラシーと金融リテラシー

環境に対する意識(環境リテラシー)別で金融リテラシースコア (FLS: 金融知識 3 問の平均正答数) を比較すると (表 5)、1%水準で有意差が見られ、「あまりあてはまらない」の平均正答数が 1.52 で 1 番高く、「当てはまる」が 1.23 で 1 番低い。環境に対する意識を 2 分類で比較すると、環境を意識していない (あてはまらない) の方が金融リテラシーは有意に高い。

男女別で比較すると、男性は全体と同じ傾向が見られるが、女性には有意差は見られない。年代別で比較すると (表 6)、60 歳以上で 5%水準の有意差が見られ、環境を意識していない方が金融リテラシーは有意に高い (但し、男女で分けて見ると、5%水準以上の有意差は見られない)。

この結果は、環境意識の高い人は金融を苦手をしているという Anderson and Robinson (2022) の結果と一致している。

表 5 環境リテラシー別の金融リテラシーの比較 (全体・性別)

【全体】

環境にやさしい商品を選ぶ					
全体	1.当てはまる	2.やや当てはまる	3.あまりあてはまらない	4.あてはまらない	Kruska-Wallis 統計量
サンプル数	188	770	584	171	
FLS	1.23	1.39	1.52	1.41	13.3***

全体	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	958	755	
FLS	1.36	1.50	2.78***

【男性】

環境にやさしい商品を選ぶ					
男性	1.当てはまる	2.やや当てはまる	3.あまりあてはまらない	4.あてはまらない	Kruska-Wallis 統計量
サンプル数	71	366	306	105	
FLS	1.48	1.49	1.73	1.58	9.45**

男性	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	437	411	
FLS	1.49	1.69	2.84***

【女性】

環境にやさしい商品を選ぶ					
女性	1.当てはまる	2.やや当てはまる	3.あまりあてはまらない	4.あてはまらない	Kruska-Wallis 統計量
サンプル数	117	404	278	66	
FLS	1.08	1.30	1.30	1.14	6.79*

女性	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	521	344	
FLS	1.25	1.27	0.37

表 6 環境リテラシー別の金融リテラシーの比較 (年代別)

【全体・年代別】

環境にやさしい商品を選ぶ			
20-30 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	135	246	
FLS	1.50	1.47	-0.24

40-50 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	322	287	
FLS	1.51	1.61	1.19

60 歳以上	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	501	222	
FLS	1.22	1.38	2.02**

【男性・年代別】

環境にやさしい商品を選ぶ			
男性:20-30 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	62	121	
FLS	1.76	1.69	-0.14

男性:40-50 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	151	162	
FLS	1.60	1.83	1.81*

男性:60 歳以上	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	224	128	
FLS	1.33	1.51	1.64

【女性・年代別】

環境にやさしい商品を選ぶ			
女性:20-30 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	73	125	
FLS	1.27	1.25	0.19

女性:40-50 歳代	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	171	125	
FLS	1.43	1.34	-0.84

女性: 60 歳以上	当てはまる (1・2 合計)	あてはまらない (3・4 合計)	Mann-Whitey 統計量
サンプル数	277	94	
FLS	1.13	1.20	0.61

5. 金融行動との関係

以下、様々な金融行動別で、環境リテラシーと金融リテラシーを比較する。比較可能なように、両方とも標準化得点 (個別点数-全サンプルの平均値) /全サンプルでの標準偏差) にしてから平均値を算出している。

(1) クレジットカードに対する態度 (問 18)

クレジットカードに対する態度別で比較すると (表 7)、「a」から「d」については環境リテラシーに有意差は見られないが、金融リテラシーには 5%水準以上の有意差が見られ、「a. 持っている则便利だ」と「b. 現金で買うよりもお得」については、「そう思う」の金融リテラシーが 1 番高く、「c. 持っている則ステータスになる」と「d. 使いすぎる恐れがある」については、「思わない (「あまり」と「そう」の計)」と回答している人の方が金融リテラシーは高い。

「e. 犯罪に利用される恐れがある」と「f. 宣伝を法律で制限すべきだ」については環境リテラシーと金融リテラシーともに 5%水準以上の有意差が見られ、共感度が高い人ほど環境リテラシーが高く、「f. 宣伝を法律で制限すべきだ」については、共感度が高い人ほど金融リテラシーは低い (「e」については、金融リテラシーとの明確な関係は見られない)。

表 7 クレジットカードに対する態度と環境・金融リテラシーの比較

a. 持っている则便利だ				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	1167	-0.039	1090	0.19
ややそう思う	436	0.096	383	-0.27
あまりそう思わない	142	0.049	125	-0.40
そう思わない	138	-0.11	113	-0.39
Kruskal-Wallis 統計量	6.88*		104.8***	

b. 現金で買うよりもお得（ポイントなど）				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	818	-0.017	770	0.18
ややそう思う	615	0.006	552	-0.051
あまりそう思わない	291	0.010	259	-0.18
そう思わない	147	0.007	121	-0.42
Kruskal-Wallis 統計量	0.41		54.5***	

c. 持っているとステータスになる				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	127	0.033	117	-0.061
ややそう思う	262	0.052	247	-0.13
あまりそう思わない	767	0.006	705	0.049
そう思わない	686	-0.056	619	0.037
Kruskal-Wallis 統計量	2.42		8.16**	

d. 使いすぎる恐れがある				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	747	0.033	677	-0.13
ややそう思う	691	-0.034	636	0.028
あまりそう思わない	277	0.042	249	0.23
そう思わない	163	-0.11	143	0.18
Kruskal-Wallis 統計量	2.82		29.4***	

e. 犯罪に利用される恐れがある				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	775	0.077	708	-0.091
ややそう思う	829	-0.043	754	0.079
あまりそう思わない	198	-0.084	182	0.14
そう思わない	69	-0.26	60	-0.19
Kruskal-Wallis 統計量	10.9**		16.6***	

f. 宣伝を法律で制限すべきだ				
	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
そう思う	308	0.24	275	-0.26
ややそう思う	458	0.13	417	-0.24
あまりそう思わない	768	-0.050	711	0.13
そう思わない	324	-0.32	293	0.34
Kruskal-Wallis 統計量	56.5***		85.1***	

(2) 消費者金融の利用状況（問 20）

カードローン・消費者金融の利用状況と環境・金融リテラシーを比較すると（表 8）、環境リテラシーには有意差は見られない。金融リテラシーについては 5%水準の有意差が見られ、利用者の金融リテラシーは平均よりも低く、両方とも利用していない人の金融リテラシーは平均より高い。

表 8 消費者金融の利用状況と環境・金融リテラシーの比較

	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
カードローンがある	92	0.063	84	-0.055
消費者金融がある	23	0.089	22	-0.58
両方ある	23	-0.23	22	-0.27
現在は両方ともない	1720	-0.011	1567	0.027
Kruskal-Wallis 統計量	2.21		10.3**	

(3) 日常生活の決済方法（問 21）

日常生活の決済方法別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 9）、環境リテラシーについては「スマホ決済」のみ有意差が見られ、利用者の環境リテラシーが有意に低い。但し、高齢層（若年層）ほど環境意識が高く（低く）、年齢層を反映した結果とも考えられるため、スマホ決済のみ年代別で比較したところ（表 10）、20・30 歳代のみ有意差が見られ、利用者・非利用者ともに平均より環境リテラシーは低い、利用者の方が非利用者より環境リテラシーは高い。

一方、金融リテラシーについては有意差が見られ、現金利用者の金融リテラシーは有意に低く、クレジットカードや交通系・流通系電子マネー、スマホ決済、プリペイドカード利用者の金融リテラシーは有意に高い。

表 9 日常生活の決済方法と環境・金融リテラシーの比較

環境リテラシー	利用者		非利用者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
現金	1525	0.015	378	-0.077	1.64
金券	130	0.063	1773	-0.008	0.88
クレジットカード	731	-0.026	1172	0.011	-0.62
デビットカード	51	0.13	1852	-0.007	0.79
交通系電子マネー	204	-0.049	1699	0.002	-0.45
流通系電子マネー	301	0.051	1602	-0.014	1.28
スマホ決済	730	-0.086	1173	0.049	-3.00***
プリペイドカード	105	0.15	1798	-0.012	1.52
ポイント	289	0.045	1614	-0.012	0.78
仮想通貨	0		1903	-0.003	
その他	3	0.51	1900	-0.004	0.80

金融リテラシー	利用者		非利用者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
現金	1378	-0.062	345	0.25	-5.09***
金券	119	-0.067	1604	0.005	-0.77
クレジットカード	688	0.21	1035	-0.14	6.99***
デビットカード	44	0.24	1679	-0.006	1.60
交通系電子マネー	189	0.28	1534	-0.034	4.13***
流通系電子マネー	275	0.16	1448	-0.030	2.93***
スマホ決済	693	0.24	1030	-0.16	8.07***
プリペイドカード	97	0.18	1626	-0.011	1.98**
ポイント	266	0.030	1457	-0.005	0.56
仮想通貨	0		1723	0.0001	
その他	3	-1.05	1720	0.002	-1.86*

表 10 スマホ決済と環境リテラシーの比較（年代別）

スマホ決済	利用者		非利用者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
20-30 歳代	258	-0.28	145	-0.63	3.27***
40-50 歳代	311	-0.071	346	-0.10	0.66
60 歳以上	161	0.19	682	0.27	-1.25

(4) 相続の準備状況（問 29）

相続の準備状況別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 11）、環境リテラシーで有意差が見られ、相続準備をしている人の環境リテラシーが高く、相続する者がいない人の環境リテラシーが低い。

但し、年齢層を反映した結果とも考えられるため、年代別に分けて見ると、60 歳以上で有意差が見られ、相続の準備をしている人の環境リテラシーが有意に高い。

金融リテラシーについては有意差は見られないが、相続準備をしている人の金融リテラシーの水準

は高い。

表 11 相続の準備状況と環境・金融リテラシーの比較

	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
している	134	0.27	121	0.032
していない	1561	0.00	1415	0.011
相続する者がいない	184	-0.26	170	-0.036
Kruskal-Wallis 統計量	22.7***		0.40	

表 12 相続の準備状況と環境リテラシーの比較（年代別）

環境リテラシー	20-30 歳代		40-50 歳代		60 歳以上	
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS
している	9	-0.70	22	0.18	103	0.37
していない	303	-0.40	581	-0.097	677	0.26
相続する者がいない	89	-0.39	48	-0.071	47	-0.21
K-W 統計量	1.01		1.73		8.74**	

(5) リスク性金融商品の保有状況（問 31）

リスク性金融商品の保有別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 13）、金融リテラシーで有意差が見られ、現在、保有・運用している人ほど金融リテラシーは高い（差の検定は「わからない」を除く 3 択で検定している）。環境リテラシーは有意差が見られず、関係性も見られない。

表 13 リスク性金融商品の保有状況と環境・金融リテラシーの比較

	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
現在、保有・運用している	426	-0.036	404	0.65
過去に保有・運用したことがある	82	0.097	79	0.25
いままで保有・運用したことはない	980	-0.014	897	-0.084
わからない	377	0.035	322	-0.60
Kruskal-Wallis 統計量	1.72		155.3***	

（注）Kruskal-Wallis 統計量は「わからない」を除く検定。

(6) リスク性金融商品の保有目的（問 31-2）

リスク性金融商品保有者を対象に（過去に保有していた人も含む）、リスク性金融商品の保有目的別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 14）、環境リテラシーについては「信頼できる営業担当者に勧められたため」に 5%水準の有意差が見られ、選択者の環境リテラシーが有意に高い（この項目については、選択者の金融リテラシーは（リスク性金融資産の非所有者も含めた）平均より高いが、

非選択者よりは有意に低い)。

「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」については、複数選択式では、選択者の環境リテラシー、金融リテラシーともに数値は高いが、環境リテラシーでは有意差は見られず、金融リテラシーでは有意差が見られる。金融を通じて社会的な企業を応援することが可能であることを、金融リテラシーが高い人は知っているが、環境リテラシーの高い(だけの)人は十分に認識していないということなのであろう。

表 14 リスク性金融商品の保有目的と環境・金融リテラシーの比較(複数選択回答)

環境リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
配当金・分配金・利子を得るため	350	0.025	146	-0.096	1.39
長期の資産形成・資産運用のため	319	-0.037	177	0.038	-0.80
短期の運用益を得るため	96	-0.15	400	0.022	-1.39
株主優待を得るため	111	-0.091	385	0.013	-1.05
社会的に貢献度が高い活動の企業を応援	11	0.29	485	-0.017	0.99
老後の生活資金のため	221	-0.077	275	0.043	-1.30
教育式のため	42	0.020	454	-0.013	0.41
住宅購入資金のため	10	0.025	486	-0.011	0.18
レジャーや高額品の購入資金のため	31	-0.077	465	-0.006	-0.43
信頼できる営業担当者に勧められたため	56	0.25	440	-0.044	2.28**
投資の勉強のため	97	-0.090	399	0.009	-0.86
時間の有効活用のため	32	0.018	464	-0.012	-0.06
その他	11	-0.48	485	0.0003	-1.66*

金融リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
配当金・分配金・利子を得るため	334	0.60	136	0.59	0.54
長期の資産形成・資産運用のため	305	0.74	165	0.32	4.91***
短期の運用益を得るため	92	0.80	378	0.54	2.49**
株主優待を得るため	101	0.90	369	0.51	4.11***
社会的に貢献度が高い活動の企業を応援	10	1.16	460	0.58	2.05**
老後の生活資金のため	209	0.63	261	0.56	0.89
教育式のため	42	0.57	428	0.60	0.27
住宅購入資金のため	10	0.67	460	0.59	0.41
レジャーや高額品の購入資金のため	29	1.01	441	0.57	2.41**
信頼できる営業担当者に勧められたため	52	0.25	418	0.64	-2.84***
投資の勉強のため	92	0.84	378	0.54	2.58**
時間の有効活用のため	29	0.91	441	0.57	1.92*
その他	11	0.57	459	0.59	-0.21

(注) 対象がリスク性金融商品保有経験者のため、ELS・FLS(ともに標準得点)の合計は0にはならない。

(7) リスク性金融商品の非保有目的（問 31-3）

リスク性金融商品をいままで保有・運用したことがない人を対象に、保有・運用しない理由別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 15）、環境リテラシーについては「安心して相談できる専門家がないから」の選択者の環境リテラシーが有意に高く、「取引の仕方がわからないから」や「面倒だから」の選択者の環境リテラシーが有意に低い。

金融リテラシーについては、「手数料や信託報酬がかかるから」の選択者の金融リテラシーが有意に高く、「手元に資金がないから」の選択者の金融リテラシーが有意に低い。

表 15 リスク性金融商品の非保有目的と環境・金融リテラシーの比較（複数選択回答）

環境リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
手元に資金がないから	438	0.001	526	-0.045	0.62
損をしそうだから	337	-0.044	627	-0.014	-0.29
元本割れリスクのある取引はしたくないから	293	-0.019	671	-0.026	0.085
リスク性金融商品に関する知識がないから	249	-0.04	715	-0.019	-0.28
近くに金融機関の店舗がないから	14	0.16	950	-0.027	0.75
安心して相談できる専門家がないから	136	0.19	828	-0.060	2.87***
取引の仕方がわからないから	294	-0.13	670	0.020	-2.09**
面倒だから	300	-0.21	664	0.061	-3.81***
手数料や信託報酬がかかるから	44	0.15	920	-0.033	1.22
税制がわからないから	103	-0.21	861	-0.002	-1.82*
時間的余裕がないから	112	-0.17	852	-0.005	-1.60
その他	30	-0.26	934	-0.017	-1.27

金融リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
手元に資金がないから	405	-0.17	481	-0.001	-2.43**
損をしそうだから	316	-0.11	570	-0.061	-0.66
元本割れリスクのある取引はしたくないから	276	0.11	610	-0.16	4.10
リスク性金融商品に関する知識がないから	227	-0.008	659	-0.10	1.34
近くに金融機関の店舗がないから	13	-0.028	873	-0.078	0.27
安心して相談できる専門家がないから	127	-0.088	759	-0.075	-0.10
取引の仕方がわからないから	270	-0.11	616	-0.062	-0.63
面倒だから	275	-0.073	611	-0.079	0.11
手数料や信託報酬がかかるから	41	0.26	845	-0.093	2.32**
税制がわからないから	95	-0.20	791	-0.063	-1.23
時間的余裕がないから	106	-0.072	780	-0.078	0.08
その他	28	-0.12	858	-0.075	-0.25

（注）対象がリスク性金融商品非保有経験者のため、ELS・FLS（ともに標準得点）の合計は0にはならない。

(8) 長期資産形成の必要性（問 32）

長期資産形成の必要性に対する考え別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 15）、金融リテラシーで 1%水準の有意差が見られ、必要性を強く感じる人ほど金融リテラシーが高くなっている。一方で、環境リテラシーには有意差はなく、関係性を見られない。

表 16 長期資産形成の必要性和環境・金融リテラシーの比較

	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
非常に必要性を感じる	193	-0.12	188	0.73
やや必要性を感じる	364	-0.016	337	0.42
どちらともいえない	498	0.004	454	-0.13
あまり必要性を感じない	453	0.018	397	-0.23
まったく必要性を感じない	341	-0.005	308	-0.37
Kruskal-Wallis 統計量	3.20		224.4***	

(9) リスク性金融商品に対する魅力（問 33）

リスク性金融商品に対する魅力別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 17）、金融リテラシーについては、いずれの項目でも有意差が見られ、特に「税金が優遇される」や「手数料や信託報酬が低い」といったランニングコストをあげる人の金融リテラシーの水準が高い。環境リテラシーについては、いずれの項目においても有意差は見られない。

表 17 リスク性金融商品の魅力と環境・金融リテラシーの比較（複数選択回答）

環境リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
少額から始められる金融商品	625	-0.006	1225	-0.004	-0.03
リスクの少ない金融商品	704	-0.019	1146	0.004	-0.37
税金が優遇される金融商品	556	0.007	1294	-0.010	0.15
仕組みが分かりやすい金融商品	599	-0.020	1251	0.003	-0.36
手数料や信託報酬が低い金融商品	383	-0.009	1467	-0.004	-0.14
その他	17	-0.35	1833	-0.002	-1.45
わからない	641	0.024	1209	-0.020	0.83

金融リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
少額から始められる金融商品	591	0.19	1100	-0.088	5.57***
リスクの少ない金融商品	665	0.22	1027	-0.12	7.08***
税金が優遇される金融商品	527	0.43	1165	-0.18	11.5***
仕組みが分かりやすい金融商品	557	0.18	1135	-0.071	4.84***
手数料や信託報酬が低い金融商品	364	0.50	1328	-0.12	10.4***
その他	12	0.085	1680	0.010	0.19
わからない	554	-0.45	1138	0.24	-13.2***

(10) 税優遇のあるリスク性金融商品の保有状況（問 34）

税優遇のあるリスク性金融商品の保有状況別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 18）、いずれの金融商品についても保有者の金融リテラシーが有意に高い。環境リテラシーについては、どれも利用していないの選択の有無では有意差は見られないが、ジュニア NISA とつみたて NISA 保有者の環境リテラシーは有意に低くなっている。

表 18 税優遇リスク性金融商品の利用状況と環境・金融リテラシーの比較（複数選択回答）

環境リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
一般 NISA	171	0.071	1674	-0.011	1.06
ジュニア NISA	23	-0.44	1822	0.002	-2.10**
つみたて NISA	197	-0.14	1648	0.012	-2.16**
iDeCo	102	-0.061	1743	-0.0003	-0.76
どれも利用していない	1458	0.003	387	-0.029	0.61

金融リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
一般 NISA	164	0.76	1518	-0.065	9.77***
ジュニア NISA	21	0.90	1661	0.004	3.88***
つみたて NISA	185	0.49	1497	-0.043	6.63***
iDeCo	97	0.74	1585	-0.029	7.22***
どれも利用していない	1314	-0.14	368	0.58	-12.1***

(11) 新 NISA の利用意向（問 35）

新 NISA の利用意向別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 19）、環境リテラシー、金融リテラシーともに 5%水準以上の有意差が見られ、環境リテラシーについては「専門家に相談して検討したい」や「利用するつもりはない」の環境リテラシーが高い一方で、これらの選択者の金融リテラシーは平均より低い。「利用したい」の金融リテラシーの水準が 1 番高い。

表 19 新 NISA の利用意向と環境・金融リテラシーの比較

	環境リテラシー		金融リテラシー	
	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
利用したい（継続利用を含む）	369	-0.085	346	0.61
利用するつもりはない	903	0.031	803	-0.26
専門家に相談して検討したい	102	0.15	86	-0.11
これから自身で検討したい	472	-0.071	450	0.048
Kruskal-Wallis 統計量	9.14**		173.0***	

(12) 預金等のある金融機関（問 47）

預金等のある金融機関別で環境・金融リテラシーを比較すると（表 20）、預金等の金融機関がない人の環境リテラシーと金融リテラシーは有意に低い。

金融機関別で見ると、ゆうちょ銀行に預金がある人の環境リテラシーは有意に高く、ネット銀行は有意に低い（ゆうちょ銀行については金融リテラシーに有意差は見られないが、ネット銀行は有意に高い）。但し、年齢層を反映した結果とも考えられるため、年代別に分けて見ると、ゆうちょ銀行については、60 歳以上で環境リテラシーが有意に高く、ネット銀行で有意差は見られない（表 21）。また、ネット銀行利用者は全ての年代で利用者の金融リテラシーが有意に高いが、ゆうちょ銀行について有意差は見られない（表 22）。

なお、預金残高が最も多い金融機関別で比較すると（表 23）、環境・金融リテラシーともに有意差が見られ、信託銀行の環境リテラシー、金融リテラシーは高い。また、ネット銀行の金融リテラシーは高いが、環境リテラシーは低い。

表 20 預金等のある金融機関と環境・金融リテラシーの比較（複数選択回答）

環境リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
都市銀行	635	-0.013	1213	0.002	-0.31
地方銀行	1091	0.013	757	-0.026	0.80
第二地方銀行	57	-0.064	1791	-0.002	-0.49
信託銀行	63	0.18	1785	-0.010	1.68*
ゆうちょ銀行（郵便局）	1052	0.060	796	-0.087	3.39***
ネット銀行	253	-0.19	1595	0.025	-3.25***
信用金庫	384	0.046	1464	-0.017	1.26
信用組合	83	0.15	1765	-0.010	1.35
労働金庫	104	0.021	1744	-0.005	0.07
JA バンク（農協・漁協）	295	0.063	1553	-0.016	1.28
外国銀行	2	1.12	1846	-0.005	1.59
その他	11	-0.37	1837	-0.001	-1.52
預金等をしていない金融機関はない	31	-0.55	1817	0.006	-3.12***

金融リテラシー	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
都市銀行	591	0.26	1097	-0.11	7.19***
地方銀行	997	0.010	691	0.023	-0.15
第二地方銀行	54	0.32	1634	0.005	2.27**
信託銀行	57	0.69	1631	-0.008	5.17***
ゆうちょ銀行（郵便局）	967	0.041	721	-0.019	1.23
ネット銀行	244	0.56	1444	-0.077	9.11***
信用金庫	352	-0.023	1336	0.026	-0.87
信用組合	74	-0.19	1614	0.025	-1.82*
労働金庫	95	0.32	1593	-0.003	2.97***
JA バンク（農協・漁協）	261	0.019	1427	0.015	0.06
外国銀行	2	-0.40	1686	0.016	-0.55
その他	10	0.18	1678	0.014	0.62
預金等をしている金融機関はない	27	-0.40	1661	0.022	-2.21**

表 21 ゆうちょ銀行・ネット銀行と環境リテラシーの比較（年代別）

環境リテラシー					
ゆうちょ銀行	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
20-30 歳代	215	-0.38	180	-0.42	0.70
40-50 歳代	353	-0.10	286	-0.084	0.13
60 歳以上	484	0.37	330	0.092	3.95***

ネット銀行	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	ELS	サンプル数	ELS	
20-30 歳代	94	-0.48	301	-0.37	-1.15
40-50 歳代	110	-0.07	529	-0.097	0.18
60 歳以上	49	0.14	765	0.27	-0.90

表 22 ゆうちょ銀行・ネット銀行と金融リテラシーの比較（年代別）

金融リテラシー					
ゆうちょ銀行	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
20-30 歳代	212	0.085	167	0.053	0.35
40-50 歳代	331	0.18	271	0.12	0.77
60 歳以上	424	-0.090	283	-0.19	1.37

ネット銀行	選択者		非選択者		Mann-W 統計量
	サンプル数	FLS	サンプル数	FLS	
20-30 歳代	90	0.55	289	-0.079	5.00***
40-50 歳代	106	0.69	496	0.038	6.01***
60 歳以上	48	0.31	659	-0.16	3.27***

表 23 預金残高が最も多い金融機関と環境・金融リテラシーの比較（単一選択回答）

	サンプル数	ELS	サンプル数	FLS
都市銀行	309	-0.079	291	0.27
地方銀行	593	-0.040	552	-0.079
第二地方銀行	18	-0.16	16	0.15
信託銀行	20	0.21	17	1.14
ゆうちょ銀行（郵便局）	299	0.020	274	-0.040
ネット銀行	68	-0.36	67	0.83
信用金庫	158	-0.050	145	-0.080
信用組合	19	0.13	18	0.14
労働金庫	23	0.14	23	0.063
JA バンク（農協・漁協）	94	0.098	82	-0.058
外国銀行	0		0	
その他	5	-0.70	4	0.085
Kruskal-Wallis 統計量	18.5**		59.4***	

(13) 環境意識が高い人は、金融リテラシーが低いと、サステナビリティ投資を行っていない？

「環境にやさしい商品を選ぶ」（問 1 t）について、「当てはまる」＋「やや当てはまる」とそれ以外に 2 つに分けて、金融リテラシーの点数別に更に分けて、問 31-2 の(リスク性の金融資産の保有目的として)「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」の選択率を比較する。

Anderson and Robinson (2020)の予想通りなら、環境意識が高い人（問 1 t）で、金融リテラシーが低い人では選択率が低いとなるはずである。その結果が、表 24 である。上の方が環境リテラシーが高い人の結果である。この中で、金融リテラシーが最も低い（ゼロ点）23 人についてみると、「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」を選んでいる人は一人もいなかった。金融リテラシーの点数が 1 点の人 60 人ではその比率が 1.7%、2 点の 87 人では 2.3%、満点（3 点）の 89 人では 4.5%となっており、同じような環境リテラシーを持っている人の中で、実際に「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」して投資をしている人の比率は、金融リテラシーと相関している。下段の方は、環境リテラシーが低い人であり、これらの人では「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」が少ないのは自然である。ただ、金融リテラシーの点数が満点である人については 3.3%の選択があった。これは、（環境保全には関心はないものの）「社会的に貢献度が高い活動の企業を応援」することが投資リターンを高めると考えているからなのかもしれない。

表 24 リスク性金融商品保有・運用目的「社会的に貢献度が高い活動をしている企業を応援」

「環境にやさしい商品を選ぶ」該当別・金融リテラシー別比較

「環境にやさしい商品を選ぶ」＝「当てはまる」・「やや当てはまる」サンプル				
金融リテラシー	FLS 0点	FLS 1点	FLS 2点	FLS 3点
合計	23 (100%)	60 (100%)	87 (100%)	89 (100%)
「社会的貢献度が高い企業を応援」 選択者	0 (0.0%)	1 (1.7%)	2 (2.3%)	4 (4.5%)
「社会的貢献度が高い企業を応援」 非選択者	23 (100%)	59 (98.3%)	85 (97.7%)	85 (95.5%)
カイ2乗統計量	2.02			

「環境にやさしい商品を選ぶ」＝「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」サンプル				
金融リテラシー	FLS 0点	FLS 1点	FLS 2点	FLS 3点
合計	9 (100%)	41 (100%)	68 (100%)	90 (100%)
「社会的貢献度が高い企業を応援」 選択者	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (3.3%)
「社会的貢献度が高い企業を応援」 非選択者	9 (100%)	41 (100%)	68 (100%)	87 (96.7%)
カイ2乗統計量	3.99			

6. むすび

本稿では、ゆうちょ財団が実施した「第6回 くらしと生活設計に関する調査」（2023年11月～12月 回答者1938人）の個票データを利用して、環境意識が高い人の金融リテラシーが低い傾向にあること、および、環境リテラシーが高いが、金融リテラシーが低い人は、環境に優しい投資を行っていないことを確認した。こうした結果は、先行研究と同様であった。

金融経済教育は、個人のウェルビーイングの向上のために実施するのであるが、人々がきちんとした金融リテラシーを持てば、（多くの人が環境に配慮すべきであると考えていることを前提にして）金融面においても環境に配慮した投資が行われる可能性が高まる。そうした意味での持続的な社会を形成していくためにも、金融経済教育の推進は重要であるといえる。

ただし、本稿には様々な限界がある。「くらしと生活設計に関する調査」では、環境リテラシーについて明確な尺度を得られる質問や、サステナブル投資の実施状況についての明確な質問を行っていなかった。さらに、広い意味でのサステナブル投資の代理変数として採用した質問からサステナブル投資をしていると判定できる回答者が非常に少なかったために、統計的な検出力が弱かったことに留意しておかねばならない。

今後、我々の問題意識に沿った独自の調査を実施し、環境リテラシーと金融リテラシーが環境投資に与える影響について詳細に検討をしたい。

参考文献

- 家森信善「時流 SDGs と金融経済教育の推進」 『野村サステナビリティ・クォーターリー』 vol.1-3
2020 年秋号 2020 年 12 月。
- 家森信善「時流：個人投資家の金融リテラシーとサステナブルファイナンス」 『野村サステナビリティ・クォーターリー』 2023 年秋号 2023 年 11 月。
- Anderson, Anders, and David T. Robinson (2022) “Financial Literacy in the Age of Green Investment,”
Review of Finance 26(6).